

田中裕美子 著

『日本における既婚女性の パートタイム労働』

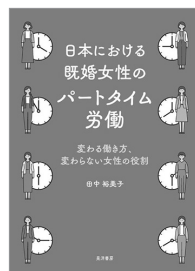
——変わる働き方，変わらない女性の役割

山本 咲子

(新潟大学人文社会科学系(教育学部)講師)

近年、労働市場における女性の働き方は多様化し、性別役割分業に対する人々の意識も大きく変化してきた。女性の就業率は上昇し、共働き世帯が多数派となった現在、表面的にはジェンダー平等が進展しているようにも見える。しかしその一方で、女性が家事・育児の大部分を担うというジェンダー規範は、依然として政府の政策設計や企業の人事管理のなかで再生産され続けている。その結果、ジェンダー平等に関する意識の変化と、実際の働き方や生活実態との間には大きな乖離が生じている。本書の主題は、この乖離はいかにして生じ、またそれを是正するためにはどのような政策が必要であるのかを問うものである。本書では、パートタイム労働の実態と政策の変遷に着目したマクロな分析と、既婚女性がパートタイム労働を選択せざるを得ない制約条件としての生活時間に注目したミクロな分析とを往還させながら議論が展開される。

序章では「なぜ女性はパートタイム労働を選択するのか」という問いが提示され、第1章ではパートタイム労働の定義と全体像が整理されるとともに、性別役割分業の影響が端的に表れる生活時間の実態が示される。第2章では、1980年代の「パートタイム労働法」の制定から最新の「パートタイム・有期雇用労働法」に至るまでの政策動向とその課題が検討される。第3章は本書の中核をなす章であり、1950年代から2010年までの約50年分に及ぶ労働省『婦人労働の実情』(現・厚生労働省『働く女性の実情』)を用いて、政策の推移と既婚女性の労働実態の変遷が丹念に検証される。さらに第4章では



● たなか・ゆみこ
社会学部教授。福井県立大学看護福

● 見洋書房
2025年3月刊
A5判・202頁
定価 3850円(本体 3500円)

生活時間の分析を通じてジェンダー規範と働き方の関係が考察され、第5章ではパネルデータを用いた有配偶女性の就業選択の分析が行われる。第6章では正社員とパート・アルバイトの賃金格差の推移が示され、終章において「変わる働き方」と「変わらない女性の役割」の間に横たわる、パートタイム労働をめぐる構造的問題が総括される。

パートタイム労働はしばしば柔軟で多様な働き方の1つとして肯定的に語られるが、本書はそれが日本社会に根強く残るジェンダー不平等の構造を色濃く反映していることを、豊富なデータと政策分析によって説得的に示している。法制度の整備が進んだにもかかわらず、既婚女性パートタイム労働者が家事や育児といった家庭責任を担うことを前提に、雇用調整の担い手として位置づけられてきた実態が、生活時間データや賃金推移の分析によって明らかにされる点は、本書の最も重要な研究成果である。

特に終章で導かれる「変わらないジェンダー規範」という結論は、本書の分析が到達した重要な帰結である。女性の労働参加が拡大し、法制度が形式的な平等を追求しても、性別役割分業意識に基づく家庭内の責任配分が変わらなければ、女性の働き方は依然として時間制約を強く受けたパートタイムに偏らざるを得ない。その結果、女性のキャリア形成は阻害され、男女間の賃金格差が再生産されるという悪循環が維持され続ける。本書は、パートタイム労働の問題を女性個人の選択や努力の問題としてではなく、日本の家族構造と社会全体のジェンダー規

範の問題として捉え直す視座を提示している点で意義深い。とりわけ重要なのは、こうした構造的問題が女性だけの問題ではなく、男性にとっても無関係ではないという点である。今後は、女性のみならず男性もまた、労働と家庭のあり方を他人事としてではなく自分事として引き受け、日本社会における家

族構造やジェンダー規範の再編を考えていくことが不可欠であろう。同一労働同一賃金の進展や、非正規雇用で働く男性の増加といった近年の動向を踏まえつつ、本書の議論がさらに深化していくことを期待したい。